

英語・文学教育実践報告：「英詩鑑賞」

——二年間の軌跡—— 補稿

関 戸 冬 彦

〔要旨〕 この報告書は昨年度本学紀要に掲載していただいた『英語・文学教育実践報告：「英詩鑑賞」——二年間の軌跡——』の補稿である。前稿は2006年夏に執筆していたので、05年度前期後期、06年度前期分までの約1年半に関する報告であったが、本稿ではその時点で触れられなかった06年度後期分について扱い、時系列・シラバスに従って各々の回を振り返っていく。また、前稿では全体的な流れしか触れておらず個々の授業に関してはそんなに詳しく述べなかつたので、その部分こそが本稿の大きな特徴である。

はじめに

この報告書は昨年度本学紀要に掲載していただいた『英語・文学教育実践報告：「英詩鑑賞」——二年間の軌跡——』の補稿である。前稿は2006年夏に執筆していたので、05年度前期後期、06年度前期分までの約1年半に関する報告であったが、本稿ではその時点で触れられなかった06年度後期分について扱う。なお、重複を避けるために触れていない若干の基本的な情報等が必要な場合は、前稿を参照していただければ幸いである。

当科目「英詩鑑賞」は通年科目であったがゆえ、シラバスなどで学生にはすでに告知してあったが、一年間を2つの大きな流れに分け、前期にイギリス詩、後期にアメリカ詩を扱う予定であったので、本稿は後期分に関するものであるがゆえに自動的にアメリカ詩、アメリカ文学に関する授業実践報告となる。具体的には詩に関連する映画を用いながら最終的にはアメリカ小説も紹介していったので、時系列・シラバス（資料1）に従って各々の回を振り返っていきたいと思う。また、05年後期も同様にアメリカ詩を扱っていたが、前稿では全体的な流れしか触れておらず個々の授業に関してはそんなに詳しく述べなかつたので、その部分に関しては本稿が初出となり、またその部分こそが本稿執筆の大きな目的である。

1 アメリカ詩を紹介するにあたって

アメリカ詩を紹介するにあたり、最初の一つとして何を紹介したらいいだろうか？それはお

そらく担当の先生方の専門分野や意向によって大きく異なってくるかもしれない。私が選んだのはホイットマンでもディキンソンでもウィリアムズの詩でもなく、アメリカ国歌の歌詞になっている、**The Star-Spangled banner** である。もちろん、この詩の持つ大きな意味は学生に解説する価値、また学生が知るべき価値のあるものだが、ただCDをかけて歌を聴かせたり、詩人を紹介して逐次訳的に詩を解説しただけでは学生が大して興味を持つはずがないことは十分に承知しているので、後期最初の授業ということもあり、導入するにあたりウォームアップとしてグループ対抗のゲーム仕立てを用いることにした。やり方は以下の通りである。**The Star-Spangled banner** は歌詞の一番に相当する部分だけなら8行からなる短いものなので、最初と最後の一行のみを記載し、あとの6行は下線があるだけのほとんど空白の紙を全員に配る。そして、正解は教室の一番前、私のすぐ後ろにある白板の中央に貼っておく。学生は6名前後のグループをその場で作り、1行ごとに担当者を決めてその1人が責任もって白板の所まで出て行き、そこに貼られた正解を暗記し、各自の席に戻った後残りの者たちに伝えるというものである。各々の制限時間は約30秒、すなわち30秒以内に該当の一行を暗記してそれを紙に記し、正確に他者に伝えるわけである。6人(行)分が終わったところで多少の時間を与え、グループ内で情報交換をさせる。よりたくさん覚えた者たちが多いグループはそれだけ正解に近くなる、というわけである。その後で、実はこれが歌の歌詞ということを伝え、今度は自分、あるいは他の者たちの暗記が正しかったかどうかをCDにあわせて聞き取り、あるいは書き取り、する。最後に私が正解を白板に大きく書き、全員が答え合わせ、となる。なお、タイトルはゲーム開始の時点、また正解を伝える時でも言っておらず、逆に答え合わせをして詩が完成した後に推測させた。(タイトル自体が詩の中で使われていることもあるので。)また、歌はホイットニー・ヒューストンが9.11同時多発テロの後にチャリティーとして発売していたものがあったのでそれを使用した。

さらに、「アメリカ」を主題に用いたいくつかの歌もあわせて聞いてもらった。例えば、**God Bless America** (原曲はリー・グリーンウッド。Civilization Ceremony、日本語に訳すと「アメリカ市民権認定式」であろうか、の際、あるいは大リーグの試合などで使用されているが国歌ではなくあくまで詩が愛国心的要素を含む普通の歌)、**Born in the U.S.A** (ブルース・スプリングスティーン) などである。紹介した後これらに該当するような歌が例えば日本にあるだろうか、と学生に問うとあまりそのようなものは聴いたことがない、といった反応だった。事実、国歌(「君が代」)以外で「日本」ということを前面に押し出した歌詞を持つ曲がチャートの上位を占めたり、国民的行事の際に歌われたりすることはほとんどないように思う。よって、詩(歌)における「日本」と「アメリカ」の差、その文化的背景の違い、を今後考えていくにあたってきっかけとしてはいい題材となった。また、スプリングスティーンの歌は同時多発テロやかつてのレーガン大統領の選挙活動などとも関連して言及できるので他にもいくつか資料とともに数曲紹介した。(活動としては歌詞の翻訳なども試みた。)

2 『いまを生きる』

アメリカ詩を扱うにあたって入門としても、あるいは詩人の名前などを包括的に眺めるにしても、比較的有益なのが映画『いまを生きる』（原題 *Dead Poets Society*）である。アメリカの全寮制私立男子高校に新人英語教員（日本でいうところの国語）のジョン・キーティングがやってきて、覇気のない生徒たちを鼓舞するのにいくつもの詩を使っているのが大きなポイントである。アメリカ詩からはホイットマンやフロスト、ソローなどの名前が、イギリス詩ではシェイクスピアなども引用され、劇中劇では生徒の一人が『真夏の夜の夢』で主演を演じる。映画作品として面白いだけでなく、引用の詩も合わせて解説できるので英米文学を紹介する教材としては非常に多くのものを含んでいる映画である。

前期の映画では詩に関する部分を中心にしてストーリーの展開上支障をきたさない程度に早送りなどして飛ばして見せていたのだが、この作品に関してはそうすることが内容的に難しいため、時間はかかってしまったがほぼ全部観てもらった。逆に考えるとそれだけ深く理解できるはず、いや、理解してもらわないと観てもらった意味がないので、この映画に関するレポートを書いてもらうことにした。しかし、ただ書けといても感想文にしかならないのは前期から、いや前年度から予想ができたので、自分が気になった点、何かを考えた点を3点あげて、なぜその3点をあげたのか具体的な理由も書くように指示した。

多かった意見は、生徒の一人でかつ主人公的な役割を担っていたニールの自殺に関する点、映画の最後で生徒たちが机の上に上がったこと、そして学校を去らざるを得なくなったキーティングに関するものであった。なお、この「気になる点を3点あげろ」というのは斎藤孝氏の著書『原稿用紙10枚を書く力』（大和書房、2004年）よりヒントを得たもので、私が普段から学生に言っている、「レポートは何かを単なる感想ではなく何かを証明すること」に通じるものがあつたためである。

余談になるが、私はその後06年末から07年初旬にかけてこの映画とソール・ベローの『この日をつかめ』、白石一文の『草にすわる』との関連性を論じた論文を書き、他の紀要に投稿論文として投稿した。その原案はこの授業を行うにあたっての下準備が元になっている。

3 『卒業』

次に扱ったのは60年代のアメリカを考える上で非常に重要な作品、『卒業』（原題 *The Graduate*）である。この作品では詩としてはサイモン&ガーファンクルの歌詞を取り上げ、課題としてはこの作品の終わり方をめぐって傑作か否かの意見を書いてもらうことにした。

映画の中で主に使われていた曲（詞）は「サウンド・オブ・サイレンス」「ミセス・ロビンソン」「スカボロ・フェア」といった曲だけでも有名なものが多く、逆にこの曲がサイモ

ン&ガーファンクルによるものであることや、この映画と関係あることを初めて知った、という学生もいたようである。聞き取りや解説には主に「ミセス・ロビンソン」を使い、その後映画とは直接関係ないが、「明日に架ける橋」についてのNHK番組を観てもらった。この番組は同曲の成り立ち、アーティストの歴史、一般市民のインタビューなどが含まれ、歌と時代を考えるには非常にいい番組であった。(公民権運動や同時多発テロとの関連など) なお、インターネット上に「明日に架ける橋」に関するちょうどよいページがあったので、これを要約してみるという英語学習的な実践もできた。これらをヒントに私が学生にあくまで「私的仮説」として話したのは、この映画『卒業』は果たして恋愛映画なのだろうか、という点であった。おそらく世間的評価も、また学生の反応も、最終場面でベンジャミンが教会からエレンを連れ去るシーンにばかり関心が行き、それ以外のことはあまり考慮にいていないのではないかと、思ったからである。事実、学生のレポートの意見を読んでも「ベンジャミンはストーカーみたいで気持ち悪い」とか、「ついて行くエレンの気持ちが理解できない」といったものが多かった。つまり、エレンに自分を投入し、それを現実世界にあてはめたら、という感想なわけである(残念ながらまたしてもレポート＝「感想」が多発してしまった)。また、映画を後半の45分くらいしか見せなかったせいもあるのだが、ベンジャミンが抱える社会と自分との距離感に関する苦悩や、ロビンソン夫人と関係を持つに至った経緯など(ロビンソン夫人から半ば強制的に迫った)は飛ばされてしまい、「娘の母とつきあっていなんてひどすぎると思います」という、劇中の人物を叱るようなコメントもあった。もちろん、映画を見る前にストーリーは英語の資料で確認していたのだが、私はレポートを回収して読んだ次の週に改めてもう一度ストーリーを説明し、また、原題 The Graduate の意味(「卒業生」であって、邦題の「卒業」ではない)も解説した。(それにも関わらず最後まで「なにかの卒業かわかりません」と頑なに邦題にこだわるものもいた) また、私の「私的仮説」では、ベンジャミンは公民権運動などのマイノリティー、ロビンソン夫人は旧体制、エレンは一般市民の象徴と仮定し、物語全体が当時の混沌としたアメリカの時代を表しているのではないかと述べた。こう考えると、差別や体制が当たり前という現実を打破しようとしている、またそれがいかに難しいか、を語る物語となり、表面的な「不倫」や「略奪愛」といった俗的ないやらしさなどは消え、また違った角度から最終場面が考えられるのではないかと、という仮説である。これに関してきちんと述べるのであれば詳細な論考、証明が伴うため、それは違う機会に譲りたいが、どうも学生たちは先にも述べたようにベンジャミンとエレンの奇抜な行動(結婚式の最中に教会から二人で逃げ出す)以外は考えられないようであった。(なお、この作品を他の学校(共学)で見せて意見を聞いたところ、最終場面をめぐっては男子と女子では反応が違い、男子の中にはベンジャミンの行動を賞賛するものが比較的多く、男女の反応の差とその原因を探るとまた違った研究ができるかもしれない。)

4 『スタンド・バイ・ミー』

『スタンド・バイ・ミー』は学生にとってはおそらく前二作品よりもなじみがあり、また観たことがあった学生もいたように思う。詩としてはタイトルと同じ Stand By Me を扱った。これには様々なバージョンがあり、そのひとつは元ビートルズのメンバー、ジョン・レノンが歌ったものがある。これにひっかけて、またこの授業を行った時期がちょうど12月初めというジョンが暗殺された時期と重なったため（あえてそうしたのだが）、ジョンの人生を追った映画『イマジン』も扱った。そして、さらにはジョンの暗殺とつながりの深いアメリカ文学作品、『ライ麦畑でつかまえて』にも触れた。

Stand By Me は映画同様、学生には認知度が高いとはいえ、一字一句全ての歌詞を覚えている学生もそんなにはないだろうとの判断から、最初は英語学習としての歌詞のディクテーションから入った。曲も、ベン・E・キングのオリジナル、ジョン・レノン、さらには珍しいブルース・スプリングスティーンのカバーも使い、3度聴いて書きとってもらった。その後、この曲を元に映画が出来たと解説し（通例は逆のパターンが多いように思う）、原作についても触れた。原作はスティーブン・キングで、彼の自伝的作品とも言われている。幸いなことに The Body というタイトルのもとにペンギンリーダーズ（Level 4）に入っているため、手軽に図書館などで読むことができるのでその情報を伝えるとともに、授業としてはその第1章と最終章をとりあげ、それぞれ簡潔に要約してもらった。そうすることでストーリーのあらましと主な登場人物について英語を通して知ることができると考えたからである。改めて考えてみると、この作品は『いまを生きる』同様、登場人物のほとんどが少年であって少女は出てこないにもかかわらず、学生にはそれなりに好意的に（『卒業』よりもはるかに）受け入れられたことは興味深かった。

さて、映画を観終わった後は上記のように、ビートルズを含めジョン・レノンについての講義をした。アメリカ人に有名な日本人は、と問えば「オノ・ヨーコ」とかえってくるのが少なくないことを考えれば、この授業でジョン・レノンを扱うことは決して逸脱ではないだろう。映画『イマジン』を観てもらいながら、前半は誕生からビートルズ全盛時までを追い、後半は Love & Peace 活動と暗殺の経緯を解説した。なお、宿題としてジョンに関する英文（正確には高校3年用のリーディング教科書のある1章にジョンについて取り上げられているのを発見したため、その1章を縮小コピーして丸々全部渡した）を要約するという課題を出した。過ぎてしまった教科書は振り返らずではまずい、また短大生だから高校生のもは簡単と思いがちだがこれが実際そうでもない、というのを確認してほしかったのと、高校までの英語学習はもちろん大切で、決して無駄ではないということをほのめかした。（私見にすぎないが、年齢があがれば自動的に語学力があがるなどということはあるとは思っていない。）

そして、暗殺の経緯を説明するにはやはり『ライ麦畑でつかまえて』を扱わなければならない

(暗殺者チャップマンは殺害する寸前にこの本を読み、殺害後も現場で読み直し、さらに法廷でも「何か言いたいことはあるか」と問われた際に返答としてこの本の一部分を引用した)、また数年前に村上春樹が『キャッチャー・イン・ザ・ライ』というタイトルのもとに新訳を発表したこともあり、翻訳の研究対象としても取り上げるにふさわしいと判断した。よって、まずは有名な『ライ麦』の冒頭の部分を各自訳してきてもらい(これはその場では時間がかかってしまって授業時間がもったいないので宿題にした。その際、すでに有名な訳があるのと、その両者に自分が精通していることを伝え、宿題だからと写したところで意味もなければすぐにバレると釘を刺しておいた。)、次の授業の際に旧訳(野崎孝訳)と村上訳、そして各自の訳とを比較してもらった。特に具体的な理由を聞いたわけではなかったのだが、概して村上訳のほうが読みやすい、というのがこの課題後の大方の意見であった。なお、『ライ麦』を真剣に研究しようと思うと国内外問わず膨大な資料があってその選別だけでもかなり苦勞するのだが、私は昨年の授業終了時にこれらの資料整理を思い立ち、05年12月末から06年1月冒頭にかけてこれら、中でも村上訳前後に国内で出版された『ライ麦』に関する資料、を主題ごとに分けて整理を試みた。本稿末に載せてある参考文献がそれにあたる。ちなみに、学生には有志のものにのみ配布した。(枚数が多すぎ、縮小しても結構な分量になったため、必要でない学生にも配布してしまうと紙の無駄が多すぎると懸念したため。)

5 『グレート・ギャツビー』

冬休みを終えた年明け最初、いや全授業的には最後、に扱う映画であり、また作品となったのが『グレート・ギャツビー』である。もちろん、これは詩作品ではないのだが、先に扱った『ライ麦』との関連性やT.S.エリオットからの影響、また奇しくも06年秋に『ライ麦』同様、村上春樹による新訳が発売され、新聞や書評などでも話題となった作品であったので、そういう意味では『ライ麦』の次に扱うのはとてもタイムリーであろうと判断した。そして私自身が私物としてこの『ギャツビー』の映画(正確にはイギリスのテレビ局が2000年に制作したドラマ。日本でレンタルなどはされていない。)を持っていたので、授業内で観てもらうには字幕(英語の字幕すら)もないので英語を専攻して学んでいる学生には貴重かつ必要な経験だろうという経緯もあった。もちろん、ロバート・レッドフォード主演のものがあるのは知っているが、それは上記と反し字幕つき、かつレンタル屋で簡単に入手できるので、興味が湧いたのなら各自が後日借りれば良いということで、あえて私の「字幕なし」、を映像教材として用いた。

導入としては、『スタンド・バイ・ミー』の時と同様、ペンギンリーダーズ(Level5)を紹介し、その解説を用いて作家、作品の解説、また人間関係をよりよく理解してもらうために(字幕がないのと『卒業』の時の反省もあって)、日本語の要約プリントを用意して取り急ぎ内容、物語の展開を理解してもらった。

課題としては、まず英語学習的に上記の作家・作品解説に関する英文を要約することから始めた。上記のように英文はペンギンリーダーズを用いたが、場所などの地図は原書に詳しいイラストがあったのでそれを見せて解説した。そして、先にも述べたがこれも旧訳・新訳（どちらも『ライ麦』と同じ野崎、村上訳）があることを紹介して、今回は冒頭ではなく、小説最後の一節を訳して比較してもらった。単に一字一句を逐語訳、というのは授業としては基本的に受けがよいはないが、このように「翻訳」として取り上げ、比較などさせるとそんなに嫌悪感を抱かれないように思う。非常に大まかなことを言うと、これは同じ活動でも持って行き次第で学生の動機付けができる、ということではなかろうか。

なお、この『ギャツビー』に関してのレポートは要求しなかった。というのも、以下に記してある最終レポートを冬休みも利用してやってもらおうと思っていたので、告知を12月の最終授業時にしたために授業として本当に最終回の1月中旬ではもうこれ以降の課題は出せなかった、また回収するのが物理的に不可能だった、という事情もある。

そして解説をはさみながら映画を最後まで観てもらった後、散々今までレポートを課してきたお詫びというわけではないが、私なりの『ギャツビー』に関する「客観的論考」（あくまで手短かなものでとても論文とは言うに及ばない。資料2）と「私的感想文」（資料3）を披露して授業の締めくくりとした。これらから察するに『ギャツビー』を用いたのは私の一個人的な思い入れにすぎないのでは、とのご批判があるかもしれない。確かにそういう部分が全くないとは言い切れないが、『ギャツビー』が20世紀アメリカ文学史において極めて重要な作品であることは疑いない事実であるし、またこれまで述べてきたように翻訳のような観点からも、あるいは一年の最後に字幕なしで英語の映画にチャレンジする、という意味でも、活動的に最後にふさわしいものであったとご理解くださったなら幸いである。

6 レポート・課題・評価などについて

さて、前稿でも強調したのだが、レポートを書くということを教えるのはなかなか難しい。こちらがどんなに説明しても、また参考文献や資料、時には恥ずかしながら私自身の書いたものまで紹介してみても感想文から抜け出せない学生が多く、苦勞した。結果的には残念ながら最後までその真意を汲み取ってもらえず、感想文にしかならなかった学生がいたこともまた事実である。よって最終レポートはそこを逆手にとり、あえて感想文もいいことにした。といっても、3種類のうちの1つとして、である。つまり、レポートを3種類書いて（書き分けて）もらった。ひとつは授業で扱ったものを、資料などを参照しながら自分なりに批評的に検証するもの、次に自分の好きなものを好きなように書く感想文、そして最後がその自分の好きなものを授業で扱ったようなやり方で資料を用いながら批評的な文に仕上げる、といった先の2つを合体させたようなものである。このように3つ書いてもらった理由は、上記のようにどうしても感想文になってしまうのならそれをまず作り、同じものを別の角度へと展開させて欲しか

ったからである。それと同時に、学生としてもいくら題材が同じと言ってもさすがに3つとも同じことは書けないわけで（書いたらそんなものは評価に値しないと強く警告したが）、そうすれば必然的に違うものを書かざるをえなくなるのではなかろうか、と考えたからであった。

告知にあたっては、年間の授業を通して伝えてきたようにどうしても自分の頭だけで考えると感想文にならざるをえないため、インターネットを含む他者の意見や図書館にある本など、つまり参考文献を明記するように指示した。ところがこれまた私の説明不足（のつもりはないのだが）からか、参考にする＝該当部分を写していい、と勘違いしたものもいて、インターネットなどでは映画に関する個人的感想など山ほどあるわけで、それをそのままコピー＆ペーストしてできあがり、としているものもいた。私の意図はもちろん、それらを踏まえながら自分との類似、相違を考えてほしかったのだが、これまでそういうことをやったことがないのかもしれないが（また私の授業内で小課題としてやっているにもかかわらず）、こちらが驚くような初歩的ミスもあった。もちろん、逆にそうではなく、私の意図を汲んでくれて、非常にいいレポートを書いてくれたものもいたことを、忘れずに付け加えておかなければならない。

よって評価はこれらのレポートと、これまでの各回に出した宿題・小課題を点数化し、さらに出席点を考慮に入れた上で最終成績をつけた。通年の科目ではあるのだが、学年末に全てのものを合算するのはとても大変なことになるので、前期はすでに前期分を100点満点で前期末に算出しており、それにこの後期分を合わせて2で割ったものが最終成績となった。

最後に

前稿でも最後に述べたが、これがいわゆる4年制大学の文学部の「アメリカ詩」と名のついた授業であれば、詩がメインなのか映画がメインなのか渾然一体としていてよくわからず、相当逸脱したもののお叱りを受けて当然かもしれない。しかし、学生たちはあくまで学者になるわけでも大学院受験をするわけでもなく、あと数か月で社会に出て行くわけであるから、文学史のテキストを開けば書いてあるようなことを私が講義しても楽しいとは思ってくれないであろうことは十分に承知していたので、このような、なるべく自分たちの身近にあり、かつ何かの時に思い出し、いつか生きるヒントになってくれればとの願いのもとに組み立てたシラバス、展開した授業であったことをご理解いただければと思う。また、取り上げたもののうちのいくつかは本来であれば一年かけてじっくりゼミなどで読み、研究すべきものをわずか2、3週で終えてしまうところに心苦しさも感じたが、全体を俯瞰することに努めた授業であったがゆえ、本当に興味を持った学生はその後個人的にそれらに触れてくれることを願う。

なお、個人的な話になるが、この「英詩鑑賞」は私が教員として初めて担当させていただいた文学関連科目であった。もちろん、これまでにいわゆる語学としての「英語」、あるいは本学で言うところの「スキル科目」にあたるものはたくさんやってきたが、そういうものと比較した際にやはり「専門科目」という響きは重く、それ相当のものを提供しなければというプレッ

シャーは多大であった。そんな私の胸のうちを知るよしもなく毎回熱心に聞いて絶えず積極的に参加してくれた学生諸君、あるいは最後に行った授業評価アンケートに「今まで受けた授業の中で一番面白かったです」といったようなコメントを書いてくれた諸君、にはお礼を言っても言い尽くせないくらいである。そして、私にこのような素晴らしい機会を与えてくださった本学の諸先生方にもこの場を借りて改めて御礼申し上げて、本稿の結びとしたい。

資料1 06年度シラバス（後期該当部分のみ一部抜粋）

2. 授業内容および授業の配分	
<16週>	アメリカ詩に触れてみよう
<17週>	スプリングスティーン、そして「いまを生きる」
<18週>	「いまを生きる」とホイットマン
<19週>	「いまを生きる」とソール・ベロー
<20週>	歌詞を詳しく眺めたら・・・ その3
<21週>	「卒業」とミセスロビンソン
<22週>	サイモン&ガーファンクルと明日に架ける橋
<23週>	歌詞を詳しく眺めたら・・・ その4
<24週>	「スタンド・バイ・ミー」をいろんな角度から
<25週>	ビートルズとジョン・レノン
<26週>	ジョン・レノンはなぜ殺されたのか？
<27週>	「ライ麦畑でつかまえて」とロバート・バーンズ
<28週>	ホールデンのココロをおいかけて
<29週>	アメリカ詩・アメリカ文化の総まとめ
<30週>	「文学とは何か？傑作とは何か？」についての最終答弁
4. 試験評価方法	出席，小レポート（宿題），学期末レポートを総合的に評価
5. 使用テキスト・教材など	毎時必要に応じてプリント配布
参考書・その他	映画で英詩入門（平凡社），アメリカ文学案内，イギリス文学案内（朝日出版社）

資料2 『グレート・ギャツビー』は傑作か否か

私は傑作の定義を、普遍的なテーマが描かれており、人間として回避することのできない根本的な問いかけが含まれている作品、とする。以下、この二点において『グレート・ギャツビー』がその条件を満たしているが故に傑作であることを証明する。

まず、この作品が持つ普遍的なテーマとは、精神性を伴った恋愛感情である。ギャツビーはダイジーを取り戻すために5年の月日を費やし、彼女がすでに結婚しているにもかかわらずその想いをもち続けた。現代の感覚からすればただの不倫であるが、結婚がまだ自由でなかった時代、そして恋愛そもそもその成り立ちの歴史を振り返れば不倫こそが恋愛としての尊い感情であったことがわかる。恋愛

が誕生したと言われる12世紀フランスでは、結婚とは領主と小作、つまり身分の上下を伴う契約関係であり、好き嫌いを挟み込む余地は微塵もなかった。よって、誰かを慕うという恋愛感情は今で言う不倫においてしか、存在しえなかったのである。ただし、それは我々が現在の不倫という言葉から想像するメロドラマ的な薄汚いものではなく、身分の低い男性が高貴な女性に想いを捧げるという大変尊い精神的なものであった。それはまた、当時の男女のヒエラルキーを逆転させたものであり、その想いを貫くために男性は人間の成長、つまり忍耐や精神性など、の相当な努力を伴うこととなった。この点に関して、『ギャツビー』では、ギャツビーはデイジーを想い続けることで、特に彼の場合は物質的にも、成長を遂げており、上記の、身分の低い男性が高貴な女性を思い続け、それによって変化していく、という普遍的なテーマに則っている。よって『ギャツビー』には普遍的なテーマが含まれていると言える。

次に、人間として回避することのできない根本的な問いかけとは、過去とどう対峙するかである。人は誰しも過去、あるいは歴史、といったものへの対処に戸惑い思い悩む。日本という国の歴史を考えれば、第二次世界大戦をどう受け止めたらよいのか、決着がついているようでいまだつけられていない。ギャツビーも己の喪失してしまった5年という歴史に決着がつけられず、ニックに対して「過去は取り戻せるさ」と言い放つ。そしてデイジーのために5年を費やし、それが崩壊していくというのは、1920年代のアメリカ経済を体現しているだけではなく、ありとあらゆる栄華に対し、必ず終わりは来るのか、と問いかけている。この一個人の栄枯盛衰は古くは古代ローマ帝国という国家の栄枯盛衰、現代では巨万の富を有しながら逮捕されていった企業家の栄枯盛衰を思い起こさせる。結果として過去が取り戻せなかったとしても、その過去を自分の中でどう対処していくのかという問いは人間として回避することはできないものである。それは一個人が死に直面した際、生と死の意味を考え、己の歩んだ道を振り返ってみるならば、明らかなことである。その点において『ギャツビー』にはこの重要な問題が含まれている。

このように、『ギャツビー』は傑作の定義、普遍的なテーマが描かれており、人間として回避することのできない根本的な問いかけが含まれている作品、にあてはまるが故に傑作と言うことができる。(参考文献などは紙面の都合上割愛させていただいた。)

資料3 我こそは平成のギャツビー

なぜ私はアメリカ文学を学んでいるのだろうか？なぜ私はアメリカ文学にこだわり続けているのだろうか？ 答えは簡単である。ギャツビーがニックに「過去は取り戻せるさ」と言い放ったように、私も「過去を取り戻す」ために今を生きている。いや、生きていなければならないからである。

振り返ってみれば、私が何か本を読んで感動した時、その感動の原因を突き詰めてみれば大抵そこに自分自身を見出していた。それはカラオケで歌詞の世界に没頭し、自己陶醉してしまう者に似て基本的には独りよがりな心酔にすぎないのだが、そうせざるを得ない状況があるのもまた避けられない事実として認めざるをえない。つまり、本を読んでいるうちにいつの間にか本を「読んで」いるのではなく、本の中に「入り」こんでしまっているのである。「そんなものは子どもがウルトラマンになったつもりなのと同じじゃないか」と言う人もいるだろう。確かにその通りかもしれないが、違いがあるとすれば私はそこに生きる「意味」をも求めてしまっているところであるし、そうでなければとくに文学などやめてもっと気楽に生きていると思う。無論、そんなことは望んでいない。

かつてサリンジャーは『ライ麦畑をつかまえて』を執筆した後、その主人公であるホールデン・コールフィールドと似たような行動をとったという。娘にフィービーと名づけようとし、彼女を連れてさながらホールデンのようにセントラルパークを歩き、回転木馬に向かった。そしてホールデンがセックスをすることがイノセンスを失うと考えていたように、娘が妊娠したと知ると喜ぶどころかえらく不機嫌になったという。フィッツジェラルドはギャツビーがデイズを追いかけたようにゼルダを追いかけ、貧困の中から金持ちへと成り上がっていった。もちろん、実際のフィッツジェラルドは後にゼルダと結婚し、ギャツビーのように死んではいないが。やはり作家はこのように自分の人生と作品とが切り離せないものなのだろうか。私は思う。切り離せないからこそ文学なのであると。

それにしても、「過去を取り戻す」とはどういうことだろうか。そんなことに意味はあるのだろうか。私はどうしても過去を葬りきれない。過去を葬り去り、忘却の彼方へと押しやることは自分から目を背け、偽りの仮面を被っているようなものだ。つまり、今の自分を納得させるためには、そして今自分がここに生きていることが間違っていないと明言するためには、どうしても過去を肯定しなければならない。もちろん、それは自分の気持ち次第でどうにでもなるんじゃないかと賢明な諸君は私に告げてくれるだろう。しかしそれがそんなに簡単でないことは、過去の文学作品が我々に語ってくれている。だからこそ我々はこれらの作品を賞讃し、そこから己の行くべき道を学ばんとするのではなからうか。

よって、我こそは平成のギャツビー、今日も過去との折り合いをつけるためにこの東京で生きている。最後に一言だけ。To be, or not to be, that is a question. ? *Hamlet*
(原案は06年1月に執筆。本授業用に07年1月に改訂。)

参考文献（本稿に関係ある拙著のみ）

- 関戸冬彦（2007）英語・文学教育実践報告：「英詩鑑賞—二年間の軌跡」文京学院大学外国語学部文京学院短期大学『紀要』第6号1－11頁
- （2007）再生へと向かう息子たち- Seize the Day, Dead Poets Society, そして『草にすわる』 明治学院大学大学院英文学専攻紀要『ねびゆらす』第35号 25－38頁
- （2006）『ライ麦畑』論を整理して—新訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』以降の日本における研究動向の行方 明治学院大学大学院英文学専攻紀要『ねびゆらす』第34号 25－42頁